

～シニガミ～ アイंक
ラッド最凶のPKプレイ
ヤーと呼ばれた男

酒ノ神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

電子の牢獄から囚人を解放した《黒の剣士》と

数多の命を狩り続けた《シニガミ》。

決して交じり合うことのない英雄と化物が交錯したとき、
剛鉄の城に伝説が刻まれる。

目次

第1話	茅場への殺意	1
第2話	悪のカリスマと《シニガミ》の誕	14
生	——	14
第3話	ギルド結成クエスト	21

第1話 茅場への殺意

「あと7分か…」

先程から何度も確認しているせいか大して進んでいない時間をとてもじれったく感じながら落ち着きなく部屋をグルグル回ったり、座ったりする。

しかしそんな俺の行動も仕方がないとさえ言えれば仕方ないことでもあった。

何故ならあと10分で完全なる仮想空間を開発した茅場明彦がリリースするナーヴギア専用ソフト《SAO》の正式サービスが始まるからである。

これは従来の画面を通してのゲームなどではなく直接、仮想空間上にステージを作り上げその中で自分が動くことよって成り立つゲームとなっており、この製品を知った時のゲーマー達は興奮のあまり狂喜乱舞したのだという。その興奮はほぼゲームをしない（というよりやる機会がないだけなのだ）俺にも十二分に伝わるほどなのだから相当だ。

とまあ、そんなこんなで回想しているとついに、サービス開始1分前となったので俺はベッドに横たわり、予め電源をつけおいたヘルメット型のVRゲーム機器《ナーヴギア》をスッポリとかぶる。準備が全て完了したのを確認した途端、時計の針が13:0

Oを指したので起動コマンドを唱える。

「リンクスタート！」

すると目を閉じつつもうつすらと見えていた部屋の光が完全に消えて真っ暗になった、かと思えば次の瞬間黒とは対照の白に視界が染め上げられ目の前で視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚の五感をちゃんとナーヴギアに接続できたかを確認する青色の円が次々と端に揃っていく。

どうやら全て揃ったのちに緑色になり別れたところを見ると問題はなかったようである。次にログイン画面でアカウント名とパスワードの入力を求められるが事前にフルダイブ不適合者、通称《FNC》かチェックする際に同時にアカウントを作っておき次回からは自動入力するように設定していたので特に手を加えずとも認証成功。

最後に前の方から青色を基調とした線のトンネルが向きをこちらに視界の周りを通り過ぎていく。

俺、唐沢 佑都（からざわ ゆうと）の心ははち切れんばかりの興奮で暴れていた。

#####

青い光のトンネルが過ぎ去ると目の前の景色は白色から石を素材にした壁に四方を

囲まれた部屋へと移り変わる。

内装は目の前の壁に扉、右には木製の長机に並べられた各種武器、その隣には身長大の鏡が立てられているといった具合の良く言えばシンプル、悪く言えば殺風景な部屋だった。

まあ最初の色々な設定のためだけの場所だろうし当たり前と言えば当たり前なのだが。

そんなことを思いつつ俺、《k r a r a》はドキドキワクワクのキャラメイクに取り掛かった。

30分後：

熟考しつつ己の理想に近いアバターが完成した。

髪は黒、体は細マッチョでスタイル抜群の八：はあまり好みではなかったので七頭身。極め付けにはリアル世界の美男美女もかくやというほどの整った顔。それは全体的に鋭く凛としたものを感じさせるが一転、笑うと柔らかさが増す、そんなギャップも持ち合わせた傾国の顔面である。

そんな鏡に映った自分の姿に満足しつつ、次は最初に選ぶ武器カテゴリの選択に移る。

種類は片手剣、両手剣、細剣、片手斧、両手斧、短剣、槍、曲刀、棍となっておりそ

れぞれに長所と短所があるので少し迷いつつもオーソドックスな片手剣にした。こいつの特徴は一言で言えば「万能」である。

というのも攻撃の属性が斬撃、刺突、打撃のうち前から二つの両方を持ち合わせていて、重さも適切なステータスがあれば動きが鈍るほどではなく、なおかつリーチも普通にある、と言った具合のオールラウンドっぷりなのである。故に先ほども「万能」と評したのであるが逆に言えば特に優れる要素があるわけでもなく、いわば俺のような初心者に優しい作りとなっているのだ。

もちろん、玄人が操ればそれはそれで強力無比な武器になるのであろうが。

まあ、そんなこんなで選び終えて少し振ったり構えたりした後、特にやることもなくなつたので扉の方へと向く。

「武器も決めたことだしさっそくプレイしますかー！」

そう宣言してから目の前の扉を勢いよく開けた。

S A Oは今、また一人のプレイヤーを呑み込んだ。

#####

目を開けると同時に五感に情報が伝わってくる。

頭上を照りつける太陽の熱や吹き抜けていくそよ風、周りで聞こえる喧騒、どこかの屋台からかおる香ばしい匂い、すこし埃を含んだ空気の味：それらが全て一緒くたになつて押し寄せてくる感覚がよりSAOへの没入感を大きくし、ますます気が高ぶるのを感じられた。

「取り敢えず持ち物つと…」

はやる気持ちを抑えながら所持品を確認すべく人差し指と中指を揃えながら真下へ少し振り降ろすとチリリーンと鈴のような音がして、全体的に白色のメニューが左右二画面に分かれて目の前の空中に表示される。

そしてそれを操作していくと装備欄を見つけたのでタップして中を調べてみた結果どうやら今装備できるのは《スモールソード》という片手剣のみらしいという事が分かった。恐らくこれはスタートしたてのプレイヤーに対する運営の援助なのだろう。

ありがたく装備させてもらいつつ、他の項目もタップして調べてみると所持品は《スモールソード》を除くと無し、スキル枠は既に片手剣で埋まっているという感じだった。

取り敢えず確認すべき事は終えたので人々の間を縫うようにしながらフィールドへと向かつていった。

#####

「クツ……！」

遂に残りHPを示すカーソルの色が赤に突入し、焦る思いと共に眼前の敵を睨め付ける。

奴の名は《Frenzy Boar》。

ちようど現実のイノシシを青色に着色したような格好をして……、これは向かつてくる！

フレンジーボアが足に力を入れる《溜め》の体勢に入ったことからそう判断するや否や、ようやっと身についてきたステップによる回避技術を駆使して、飛び込んでくるちようどそのタイミングに避ける！するとそいつが風をたてながら真横を通り過ぎ、背後の……つまるところケツの部分がガラ空きになったので好機と見て剣を腰の左側あたりに、切っ先を地面に斜めに向けた状態で構える。これはソードアートオンラインの目玉の一つ、《ソードスキル》と呼ばれる必殺技を放つための予備動作である。

次の瞬間、やいばの部分がキイーン……という音と共に半透明の黄緑色に光り出し見えざる力に叩かれるように体が動く。それは通常攻撃とは比にならないくらいの威力を持つてモンスターに迫りそのまま切り抜いた、と不意にモンスターはその姿を停止さ

せ歪ませたかと思うと無数のガラス片に爆散し宙を漂ってそのまま消えてしまった。後には半透明のリザルト画面に取得経験値とコルが表示されるのみである。しかし俺にはそんなものアウトオブ眼中だ。

なぜなら「勝った」のだ！HPは残り僅かと言えども戦いに勝利してここに立っている——これが愉悦というやつか：

「クツクツクツ……」

思わず小さく笑ってしまう。そう、何度も言うが——

「こいつはスライム相当だぞ？」

……聞こえない、俺は何も聞こえてないし知らない。

近くで同じフレンジーボアと戦っていた赤髪のパレイヤーが何とかヤツを撃破しガッツポーズしたがそれを見ていた黒髪のパレイヤーがスライム相当、なんて言っているのは聞こえないっいたら聞こえない！

うん！よし！じゃあ張り切って次のモンスター狩りに出かけよう！

#####

青イノシシ狩りに夢中になっているうちに気付けば夕方になっていた。

ステージの奥には無数に円盤のようなものが浮いておりそれぞれ湖のようになって下の方から滝が流れている。それが大空に浮かぶ夕日にキラキラと反射してとても幻想的な風景だった。

安全地帯が近くにあつたので入り、中で腰を落ち着けてから改めて景色を眺めていたが案外、SAOをこういう用途で楽しむのもいいかもしれない。こんなの現実じゃ絶対にお目にかかれないしな。

「ゴーン…ゴーン…」

俺が癒されているとふと、遠くから鐘特有の重い音が鳴り響いた。

あれだろうか、「五時になりました。良い子はみんな帰りましょう」的な。

そんな馬鹿げたことを考えていると突然自分の体が青色の光に包まれる。

「うわっ、ちよっ…なんだこれ！」

未知の感覚に思わずパニックになってしまうがそんな気持ちとは裏腹に光はどんどん視界を染め上げていき…それが晴れる頃には始まりの街、中央広場へと転移していた。

「…っ」

いきなひなぜこんなことが起きたのか分からずとりあえず状況を確認するために周りを見渡してみると、どうやら自分と同じく他のプレイヤーたちも次々とここに転移させられているらしいという事が分かった。

と、するとこれは誰か：いや、運営の意図的な行動なのだろうか。

「まあ、時間が来ればわかるか」

そこで、初めて余裕が出てきてこれから何が起きるのだろうかと少しワクワクする。それから数十秒後、広場にはもう人が入りきらなくなるといところで転移の光が消え少し間置いて空に「Warning」という赤色の横長六角形パネルが表示されそれが上空いっぱいになり始めたと思うとその一つ一つのパネルの間から赤い液体が流れ出しみるみるうちに大きなローブ姿の人？をかたどっていった。

フードの奥は暗闇になっており顔は確認できない。そんな風に分析していると突然そいつは喋り始めた。

「プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ。私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ」

まじか：こりやたまげたな、まさかこのゲームの開発者が直接出てくるとは：。しかし、次の瞬間そんな驚きはさらなる驚きによって上書きされるのであった。

「プレイヤー諸君は、すでにメインメニューからログアウトボタンが消滅していることに気づいていると思う。しかしゲームの不具合ではない。繰り返す。これは不具合ではなく、《ソードアート・オンライン》本来の仕様である」

：は？いや、前半の部分まではもしかしたら不具合についての謝罪とかなのかなって

思ったよ?でも聞き捨てならないのが後半だ。“SAO本来の仕様”だって…?

更に話は続けられる。その内容をまとめると以下のような感じだ。

『頂上の第100層ラスボスを倒さないと君たちはログアウトできないよー、あとその間ヒットポイントがゼロになったら現実世界の脳みそはナーヴギアでチンツ♪だからねー!あつ、もちろん外部の手で無理やりナーヴギア引っ剥がすのもやめといた方がいいよー?その場合も同じくチンツ♪やつちやうからー!』

あ、やばい、なんか殺意湧いてきた。

そんな風に俺が静かにブチ切れていると

「それでは、最後に、諸君にとつてこの世界が唯一の現実であるという証拠を見せよう。諸君のアイテムストレージに、私からのプレゼントが用意してある。確認してくれ給え」

とか言われた。

ムカついていたので無視している間も周りのプレイヤーたちはメニューウィンドウを操作してあるものを取り出していく。それは《手鏡》だった。

少し訝しみながら反応待ちしていると次々と青い光にプレイヤーたちが包まれますわっ、転移か!?!などと思ったが何事もなくなるとまた光が薄れて本人が出てくる。

…いや、よくみると何事も無いということもなかったようだ。具体的に何があつたか

というというとズバリ“顔の変化”である。広場にいた美男美女達がリアルで見えるような普通の日本人顔になっている。まさか、まさかとは思うが…。

でも、悲しいかな。大体こんな時の嫌な予感、現実のものとなってしまふものだ。そう、俺の顔もリアルのものに…

(青い光に包まれ中…)

はい、戻ってしまいました。

これでカヤバカへのヘイトも更に膨れ上がりましたよ、え“え”!“!“!“!“

だって…だってそこそこ時間かけてメイキングしたんだよ!?!それを数秒で全て水の泡に返したヤツを断じて許してはならない!

「……以上で《ソードアート・オンライン》正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の健闘を祈る」

そう言い終わるやいなや赤ローブのAvatarは中身がなくなるように崩れ落ちていき…消えた途端空が夕方の黄昏色へパツと戻る。

しかし声をあげるものは誰一人いない、今この状態を少しでも崩せばその瞬間先ほどの宣告が本物になってしまうかともいうように。だか、思いに反して静寂の均衡はいつもとたやすく崩れ去った。

「い、やあ……!」

一人の少女が耐えかねたのかバランスを崩し後ろの男に当たる。それは静かな中ひどく大きな音となつて広間に響き渡り…

「ふ、ふざけんなあっ!!!」

「ここから出せよ!!!」

「このあと予定があるんだログアウトさせろオオツ!!!」

「いやああああ!!!」

その様子はまさに阿鼻叫喚。

先ほどとは打つて変わった状況に戸惑い、怯える者。

怒りに震え、感情のまま叫ぶ者。

耐えきれず泣き出す者。

何も考えられずに呆然としている者。

それぞれの様子は違うが全員、負の感情で心が埋め尽くされているのは共通していた。

「茅場晶彦ぶつ殺す!!!」

俺もその阿鼻叫喚に便乗して一声、そう叫んだあとおもむろにフィールドに向かつて走り出す。あいつを倒すためには強くならなければいけない、そして強くなるためにはレベルとテクニックがなければいけない、その為には戦わなければいけない!怒りのま

まにそう結論を出したのだ。

そしてやがて町の門を抜け目の前に広がる草原の中続く一本の道を駆けて抜けていく。すると突然、目の前に狼のモンスターがポップする、がそんなものは俺を止める障害にすらならず俺は足を動かしながらシャリンツ、と音を立てつつ剣を滑り抜き片手剣ソードスキル《レイジスパイク》の構えを取った後、スキル発動時に合わせて前に踏み込む。するとその刃はより強力なモノとなつてモンスターの頭部を貫き、無数のガラス片へと変えた。その後表示される取得経験値とコルを表示したウインドウに目も向けずひたすら、只ひたすらに前へと進んだ。

そう全ては——、

——茅場晶彦をぶつ殺す為にツ!!?!!?

第二話 悪のカリスマと《シニガミ》の誕生

バカヒコ打倒を決意した《始まりの日》から早一ヶ月と半分。

第一層の方で大半のプレイヤーが未知のデスゲームということもあり

約千人程がその命を散らしてしまったが、それでも攻略組は諦めずに前へ進み続け一ヶ月後、ついに第一層フロアボス《イルファング・ザ・コボルトロード》撃破という

快挙を成し遂げた。

そこからSAOにおける攻略の基本を学び取り、次の第二層はなんと第一層の四分の一の期間、つまり一週間でクリアされ現在の最前線は第三層となっている。

恐らく一人一人の戦いにおけるテクニクが上達してきており、なおかつこんなに早く階層攻略がなされていることによるモチベーションUPから今後はもつと攻略ペースが上がっていきある一定のところまで安定するだろうと思っっている。

そして俺はそれに貢献するのと自分の決意のために今日も

フィールドを駆ける・・・のであったがかなり厄介なことが起きてしまった。

「お前たちは・・・誰だ？」

目の前の存在たちに問いかけると

腰までのぼろぼろなフードを被っている五人組の内、一番奥の長身の男が答えた。

「oh・・・、俺たちみたいな不気味な五人組に対しても怖じけずに

問を投げかけられるとは・・・やっぱ生粋の攻略組様は違うってか」

それは違う。

こんなヤバそうな奴らに隙を見せてはいけないと睨みつけて虚勢を張っているだけだ。

それを見抜いているのかいないのか、そいつはクツクツと笑ってそう返答する。

「はぐらかすな、俺はお前たちに誰だと聞いてるんだ」

「おっとこれは失礼、そうだな・・・」

ここは将来最も恐れられる███PK集団《ラフィンコフィン（笑う棺桶）》とでも名乗っておこうか」

「冗談にしては趣味が悪いぞ?」

「クツクツクツ、お前らにとっては冗談だと良かったかもな」

相手の様子を見てどうやら大真面目に言っているようだと分かると途端、背筋に悪寒が走った。何せPKとは通常のネットゲ等だったらいざ知らず、ここでは本当の殺人行為となってしまうからである。

「こいつら……狂っている……ッ！」

「さてと……んじゃそろそろ☒☒パーティー☒☒といくか」

「Ahッ！ヘッド！次は俺たちに殺らせてくださいよオ！」

「そうですよ、前回はできなかつたんですからア！」

「つと、そうだったか。じゃあ今日の獲物は譲ってやる」

「「さアすがヘッドオッ！」」

前の二人が口元を弧の形に大きく歪めると同時にそれぞれの武器を

腰から滑り抜く。

一人は細剣で、もう一人は短剣である。

そいつらの殺気を真正面からもろに受け、ついに俺のポーカーフェイスが崩れる。

「アツははHHAAア！」

「こいつ、さつきまであんな睨みつけてたのに今じゃ恐怖に顔を

引きつらせてるぜえッ!」

なぜ、こんな事に？

そんな疑問が頭の中をぐるぐると回るがそんなことはお構いなしに

狂ったように笑い続ける二人組はこちらに突っ込んできた。

#

そこからは怒涛の展開だった。

同時に、またはタイミングをずらして迫ってくる攻撃を文字通り

死に物狂いで捌き続けほんの一瞬、コンマ三秒以下の隙間に思いつきりタツクルをかまし、体勢を崩し仰向けになった体に馬乗りになって何回も何回も何回も何回も驚愕と恐怖に染まった顔へ剣を突き刺し——もう一人も似たような感じだったかもしれない——そして気づいた頃には無数の結晶片が漂う中、俺がその中に佇んでいたという感じだった。

HPは残り数ドット、視界の端は赤く滲み奥の方には呆然とした様子の三人が……いや奥の男だけはなぜか愉快そうに笑っている。

すると不意に、そいつはこちらへとポーションを投げて寄越し、流暢にこういった。

「Congratulations」

とりあえず無意識のまま、貰ったポーションを上に向けてあおる。

するとトロリとしたミント風味の液体が口内を流れ落ちていきHPバーが

緩やかに回復していく。

それをぼんやりと確認しているとふたりが死亡し、残り三人となったPK集団が

脇を通り過ぎつつ長身の男が

「ついでに」

とだけ言った。

不思議とその時は何も考えられず言われるがままについていった。

もしかすると殺人に対する罪の意識から逃れるために脳が一時的に

思考を放棄していたのかもしれない。

そして歩くこと三十分、なにやら薄暗いところで真ん中に大きな机が置かれており

それを囲むように五席の椅子が並べられている部屋に着いた。

「ここは俺たちラフィンコフィンのアジトだ。

歓迎するぜ？ 未来の殺人狂さんよオ？」

「ああ・・・」

「おいおい、ツレねえなあ？ まあ初めての殺人しともくれればそうなるか。

つとまあ雑談はここまでにしておいて、お前に提案がある」

「ここで一旦言葉を切ってもつたいぶるようにしてこう言った。

「俺たちの仲間にならねえか？」

流石になぜそうなるのか訳が分からず返答に困っていると

さらなる追い打ちがかけられる。

「だって、現実に戻りたくないんだろ？」

「・・・ッ！」

「お前の戦っている最中の目はすべてを投げ打つ覚悟ができている者の目だった。なにか守りたいものがあるやつはあんなのはできねえ。

だからもしかすると・・・と思っただがどうやら凶星みたいだったな」

そうだ、俺は現実から逃れたいがためにこれ（SAO）を手を取ったんだ。

ここ最近は余裕がなくてその事を忘れていたが男によつて改めて指摘されてしまい茅場打倒への決意の思いが少し揺らぐ。

これを成し遂げてしまったらまたあの世界へと戻らなければならないのではないかと。

そこを見抜かれたのか口の歪みを深めながらさらに目の前の男は言葉による追い打ちをかける。

「どうやら気づいたみたいだな？んじやそれを解決するためにはどうすればいいと思う？俺はな・・・この城を攻略しようとしている奴ら全員を殺しちまえばいいと思うんだよ。ククツ、どうだ一緒にやってみねえか？」

だめだ、乗るな。これは悪魔の誘いだ。

そうとはわかっていても男の言葉は俺を蝕むように侵食し甘く痺れさせていった。

そして目の前の事実にはばかり囚われて麻痺してしまった心はやがて
思い出すであろう殺人に対する罪の意識さえも薄れさせ——

「その話、乗った」

口を大きく歪ませたその姿はもはや攻略組の一人である《カララ》などではなく
真正正銘、アインクラッド最凶のPKプレイヤー《カララ》、別名《シニガミ》だった。

この日、電子の牢獄に大きな災厄をもたらす存在が生まれたことを
人々は知る由もなかった。

第3話 ギルド結成クエスト

俺はつまらなかつた。

正直教室で何か話しては手を叩いて馬鹿笑いしてる奴らの話題もどこが面白いのか全く理解できなかつたし、かろうじて出来た友達とも当たり障りのない会話をたまにするだけで——どちらかというとかでペアを組まなければならぬ時に重宝していただけないかもしれない——積極的に関わることはなかつた。

かと言って家に帰ってみれば何かあるのかというところではなく、ただただこの苦しみを一時的でも紛らわせるためにネットに入り浸っていただけだった。

その頃からだろう、厭世観というものを覚え始めていたのは。

「あーあ、最近流行りの異世界召喚でも起きないかなー・・・」

学校から帰宅してまっさきに向かった自室のPC前でそう独りつぶやく。

そんなこと起きるわけないと半ば笑いながら——

「そっかそっかーなら異世界ちにおいてよー今ちようど人手不足でさー」

——笑いながら固まつた。

すると目の前のPC画面から美少女の上半身が出てきて俺のマウスを持った手を握

る。

「おひとり様ごしようたくらい！」

そう言うやいなやグイッと前方に引つ張られ・・・

「・・・つていう夢を見た」

「あははは、そりやまた妙な内容だね」

今、目の前で俺と会話しているのはラフコフ(仮)の頼れる癒し系お兄さん、《Amm》さんである。アムーと読むらしい。

「でも言ってみればこども一種の異世界みたいなもんだよね」

む、確かに言われてみればその通りだ。科学の最先端技術であるVRだが元居た場所の日常とはかけ離れた環境だと考えれば確かに異世界のようなものである。

「まあ多分、茅場も実際にそうしようとしたからデスゲーム仕様になったんだろうよ」

「彼の思いはともかくそれでこの刺激ある生活を送れているから僕にとっては万々歳なんだけどね」

最近ひとつわかったことがある。

それはこのギルド(仮)に属しているメンバー全員が何かしらリアルに疎ましさを感

じているということだ。そういう俺も例外なく同様の感覚を持っており、より具体的に言うとう「味ががいなかった」ので敬遠していた。学校では愛想笑いが溢れ家はしんとしていた。かと思えばたまに帰ってきた母親には生々しい愚痴を聞かされて正直辟易とした思いだったしその内その精神状態に引きづり込まれるようにネガティブになっていつて未来にも希望が持てなくなつた。だからだろう、あの時フルダイブできるとして話題になったナーヴギアがまるで暗闇に射した一筋の光のように思えたのは。これが単なる逃げなのだとしても一向に構わなかつた。そして無事購入が完了し、いざSAOへログインして今に至るわけである。

「ほんと俺だつてこの状況に感謝してゐるってのになんで前まで必死に攻略してたんだろ
うなあ」

「すごいやカララは元攻略組なんだっけ。こりやまた心強い後輩ができたもんだよ」
「そりや良かった」

そうして雑談を続けていた所で休憩室の扉が開きガルタからの収集がかかった。

「おい新入り、そろそろ任務だから準備しろ」

「はいよー……つてなわけでそろそろ行くよ」

「頑張つてねー」

これから初の仕事だと気を引き締めて、俺は扉の先へ向かつた。

「.....」

はい、みなさんこんばんは。カララです。

ただいま時刻は午前の1時過ぎであります。僕が僕は絶賛任務中であります。

え？なんて時間に働いてんだって？

ご安心ください、この業務内容はご老人の長話をBGMに寝るだけですから。

つと、そろそろ夢へと飛び立つ頃合のようですね。

それではこの辺で。

「ん.....」

事前にセットしておいたアラームが脳内で甲高く喚く中、俺の意識は徐々に覚醒していく。そして目の前のウィンドウに表示されているボタンを押して音を切るとさらにまだ別ウィンドウが表示されていることに気がついた。

《ギルド結成クエストを受けますか？ ○/×》

そこで完全に目が覚めると同時にさつきまでくるまっていた寝袋をアイテムスプレージにしまつてから○ボタンを押した。

そう、任された任務とはそれ即ち《ギルド結成クエストの完遂》なのであった。

しかしこのクエスト、なかなか意地の悪い仕様となつておりなんと初めにNPCの老人（このこの村の長という設定らしい）が語るありがた〜いお話を4時間も聞いてから初めて受領可能になるのだ。だから折角ならその時間を使って睡眠を取つてしまおうという事で真夜中にその老人のもとへと趣いた・・・というのはあくまで第二の理由で第一の方は「攻略組とむやみに接触することがないように」である。

今のラフコフはまだ目標に向けての準備段階であり要素要素で彼らと関わりを持つことはあれどそれ以外の場面では極力目立たぬように細心の注意を払っているのだ。

「受けるのじゃな？それでは最初にタルの木の枝十本と・・・」

長がクエスト内容を語つていくと同時にクエストウィンドウに集めてこなければならぬアイテムがチェックボックス付きで追加されていくがそれら全てがもうチェック済みになつていた。

理由は単純明快、事前にアイテムを集めていたからである。

「それでは頼ん d . . .」

「はい、集めてきました」

その瞬間、シワの刻まれたその顔が一瞬目を剥いたように見えた。

「ただ今戻りましたー」

「あ、おかえり！」

最初に出迎えてくれたのはアムー兄さんである。

そしてその後ろでリーダーのP o hが椅子に座っていた。

「よお、例のブツは手に入れたか？」

「ああヘッド、今送るよ」

メニューを開いてギルド結成のために必要なアイテム《団結の証》をP o h宛に送る。

「・・・大丈夫みたいだな。んじゃ今から正式にギルドとして登録するから全員集めろ」

「イエス、ヘッド！」

そうして俺たちはメンバーを呼ぶべく走り出した。